

不可逆性透明人間あらわる！

——『今昔物語集』卷十六第32話——

中 前 正 志

はじめに——人類何千年の夢

孤独な二十三歳の実緒は、少しばかりのライターの仕事とアルバイトで生活費を得ながら、東京で一人暮らしをしている。高校三年生の時に新人賞を受賞して作家デビューしたものの、程なくして小説が書けなくなっていたのである。ある時、一人の若い男が、購入はしなかったものの、大型書店の書棚に置かれていた自分のデビュー作を手にしたのを目撃する。そして、尾行するなどして、男が某マンションの204号室で一人暮らす大学三年生の春臣であることを突きとめる。それ以降、実緒は、掌編の小説を書いては204号室のポストに入れ続けるとともに、透明人間になって204号室を訪れるという妄想に耽るようになる。時には、同室で眠っている春臣の唇に自らの唇を重ねたり、時には、同室で春臣が同じ大学に通う恋人のいづみと性交するのを眺めたりもした。あるいは、透明人間に服は無用と、自室では夏、全裸で過ごしたりもしていた。そうしているうちに、思わぬ機会あって現実の世界でいづみそして春臣と会って、三人で海に出かけるなどした。しかし、春臣が自分を気味悪がっていることや、いづみが半ばは出版業界の人を紹介し

てほしくて自分に近付いたことを、偶然知る。そんな折、ポストに掌編を投げ込んでいたのが実緒だと知った春臣が、実緒の部屋にやって来て、掌編を書いた紙束を投げつけて去って行く。こうした経緯を経て、編集者からの電話に実緒は、「自分は透明人間だと思ひ込む人の話」を書きたい、と告げるのであった。

——平成二十五年に第三十七回すばる文学賞を受賞した奥田亜希子の受賞後第一作、『透明人間』は204号室の夢を見る』の梗概である。平成二十七年五月十日に集英社から刊行された。全一八三頁の書き下ろし作品である。

この奥田の作品以外にも、島田雅彦『透明人間の夢』（『群像』68―2、平25）のほか、島田荘司の推理小説『透明人間の納屋』（講談社、平15）やテレビドラマ化もされた大山淳子『猫弁と透明人間』（講談社、平24）がある。また、楠木誠一郎著・来世世乃絵の『透明人間あらわる！帝都（少年少女）探偵団ノート』（ポプラカラル文庫、平22）や西尾ふみ子著・朝岡千恵三絵の創作童話『透明人間になるぞ！』（銀の鈴社、平26）は、児童向けのもの。あるいは、紙芝居にも宇野克彦作・西村郁雄画『とうめい人間になったドロボー』（教育画劇、平3）があり、演劇の『透明人間』（平2劇団唐組初演）は唐十郎作、同『透明人間の蒸気』（平3夢の遊眠社初演）は野田秀樹作。漫画には、安藤ゆきの『透明人間の恋』（集英社、平25）や克・亜樹『透明人間と協定』（小学館、平24）があり、『ちいさな英雄―カニとタマゴと透明人間―』（平30）はスタジオポノック制作のアニメーション映画。映画には『透明変態人間』（株高澤、平25）などもある。テレビドラマでは、『透明人間』（平8日本テレビ系）や『透明少女エア』（平10テレビ朝日系）が知られ、楽曲にもコブクロ『INVISIBLE MAN』（作詞・作曲：小淵健太郎、平15）などがある。ムットーニ（武藤政彦）の『透明人間の帰還』（平10、『ムットーニ・カフェ』〈工作舎、平12〉に写真掲載）は、自動人形からくり箱の作品。あるいは、コスプレグッズとして『T.H.E透明人間コーティング』が販売されてもいるらしい。

平成以降に限っても、かつ日本に限っても、挙げだしたらきりが無い。右の通り、純文学作品から様々なジャンルの

大衆文化に至るまで、透明人間というものが素材として実に多く取り入れられている。それほどに人を引きつけて止まないものを、透明人間なる存在が持ち合わせているのだろう。実際、人は誰でも一度くらいは、透明人間になったらと夢見たりしたことがあるに違いない。……と、決まり文句の如くよく言われもする。例えば、次のように。

幼い頃にだれもが一度は夢みたであろう透明人間。万人共通の夢。

(H・G・ウェルズ『透明人間』〈橋本楨矩訳、旺文社文庫、昭52〉「解説」204頁)

だれしも一度や二度は透明人間になってみたいと思うときがある。

(大槻義彦『透明人間の科学 SFから物理学へ』〈講談社ブルーバックス、昭59〉22頁)

「透明人間になってみたい」誰しも、一度は考えたことがあるはずだ。

(雨宮智宏『透明マントを求めて 天狗の隠れ蓑からメタマテリアルまで』〈デイスカヴァー・トゥエンティワン、平

26〉15～16頁)

さらに、この「万人共通の夢」は、例えば江戸川乱歩が

お伽^{トウカ}漸に「隠れ蓑」というのがある。その蓑を着ると自分の姿が他人には見えなくなる。どんないたずらにしても、

どんな悪事を働いても、何をして相手にはこちらの姿が見えないのである。これは人類何千年の夢の一つであろう。
(「探偵小説に描かれた異様な犯罪動機」、光文社文庫「江戸川乱歩全集」第27巻125頁)

自分だけが透明になり、目に見えなくなったら、こんな都合のよいことはない。愛慾は思うままである。物を盗んでも、人を殺しても、絶対につかまることがない。自分のからだを見えなくするということは、人類何千年の夢であった。
(「透明の恐怖」¹⁾、光文社文庫「江戸川乱歩全集」第24巻697頁)

と重ねて述べるように、最近に見はじめられたものというのでもない。それは、「人類何千年の夢」でもあった。右の

ように述べている当の乱歩自身も、「『隠れ蓑』願望の強い男」であつたらしい（『探偵小説に描かれた異様な犯罪動機』、同右125頁）。

さて、『今昔物語集』（新日本古典文学大系）にも、「隱形」という語を標題に含んだ説話が二つ収載されている。巻四第24話「竜樹俗時作隱形薬語」と巻十六第32話「隱形男依六角堂觀音助顯身語」である。二話とも、今なお見果てることのない「人類何千年の夢」が、説話という形で結晶したものであるということになるのか。それぞれに登場する「隱形」の男すなわち透明人間は、随分と違う性質を持っているようだが、後者の透明人間には、「人類何千年」に及ぶ透明人間の文化史上において特に注目すべきものがあるように思われる。^②

一 遍在する愛欲系透明人間

『今昔物語集』巻四第24話に載る話は、もともと『龍樹菩薩伝』や『付法藏因縁伝』第五、『法苑珠林』卷五十三、『仏祖統記』に見えるもので、日本では、『今昔物語集』所載話と同文度の高い形で『古本説話集』卷下第63話や『打聞集』第13話に掲げられ、あるいは『真言伝』卷一や『三国伝記』卷二に収載されるほか、後の『三国七高僧伝図会』には「隱形徒」らを画く挿絵と共に掲載され、さらには芥川龍之介『青年と死と』の素材ともなった。そういうことなどが知られる、かなり流布した説話である。

龍樹がまだ俗人で外典の法を習っていた時のこと、二人の男とともに「隱形ノ薬ヲ造ル」。そして、「隱形」した龍樹らは、王宮に入り后妃たちを犯してまわった。「形ハ不見ヌ者ノ寄り来テ触レバ」うという、現実には誰も実感したことのないはずの恐怖を、后たちは国王に訴える。そこで、賢明な国王が王宮に粉を蒔くと、「足ノ跡ノ顯」れて三人のうち二人は斬られる。一人助かった龍樹は、「外法ハ益無」と悟って、出家して「内法ヲ習ヒ伝へ」た、ということである。

ある。『法苑珠林』（大正蔵）では「復作_二是言_一。世間唯有_下追_二求_一好色_一。縦_レ情極_レも欲、最是一生上妙快樂。宜可_三共求_二隱身之藥_一」と、そもそも好色を追求し最高の快樂を得ようとして、龍樹らは隱身の藥を求めている（『龍樹菩薩伝』などにも同趣旨）。

こうした、言わば愛欲系透明人間の話は、他にも方々に早くから存在したことが知られている。『大般若波羅蜜多經』卷五百九十二第十五靜慮波羅蜜多分之二では、隱形藥と顯形藥を入手した男が、隱形藥を服して、後宮の隱密警備員として最適であると自らを売り込み、王の認可を得たうえで王宮に入り、好き放題に王妃たちと交わる。『ジャータカ』三九一「呪術師前生物語」でも、呪文を唱えて透明人間になった男が王宮に忍び込んで、妃を犯す。プラトン『国家』も、姿を隠す手段と顕わす手段を入手した羊飼いのギュゲスが、王宮に入り込んで王妃と交わる、という類似の話を書ける。あるいは、『千一夜物語』第八四三夜「第三の狂人の物語」では、藥を臉に塗って姿の見えなくなった男が王女の寢所に入り込む。

この種の話は時代が下っても尽きず、日本に限っても、例えば、元禄八年（一六九五）の浮世草子『好色赤烏帽子』では、業平天神から授けられた、それを着けると透明人間になれるという赤烏帽子を被り、他人の情事を覗いてまわるし、同趣向の浮世草子に『浮世栄花一代男』などあること、知られてもいる。龍樹説話の影響下にあるらしい宝暦十三年（一七六三）刊『風流志道軒伝』巻四では、風来仙人から仙術を授けて透明人間となり、清の乾隆帝の後宮で官女の閨に忍び込む。さらには、落語『隠れ蓑笠』では、隠れ蓑笠の灰を身体に塗って透明人間になった男が、思いを寄せる娘のもとに夜這いに行き、中西やすひろの漫画『Oh!透明人間』（月刊少年マガジン）連載、昭57（62）では、透明人間になる力を手に入れた高校一年生の主人公が、浴室や更衣室に忍び込んだりする。『好色透明人間女湯覗き』（日活、昭54）といった類の成人映画なども数多い。

このように、透明人間になった男が、易々と部屋に侵入するなどして女を覗き見たり襲ったりするという発想・趣向は、早くから世界的に拡がっていて、その後、まさに「人類何千年」にも亘って、飽きもせず延々と繰り返されてきているのである。因みに、決して厳密なものではない、某其学大学の男女学生（男子27人、女子35人）を対象として令和二年四月に実施したアンケート調査でも、「過去に透明人間になればと空想したことがある場合、具体的にどのような内容の空想であったか」ということを問うたのに対して、男子では、「女子の家に忍び込む」「女湯を覗く」といった回答が最も多数を占めたが、女子では、「男子の家に忍び込む」「男湯を覗く」といった回答はほぼ皆無であった。乱歩も先引「透明の恐怖」にて、透明人間になったら「愛慾は思うまま」と述べていた。右の如き発想・趣向は、特に男がほとんど本能的に抱くもののように、愛欲系透明人間は、当初よりどこにでも存在しどこまでも拡散し続ける、つまりは時間と空間を超えて遍在する、原始的で普遍的な透明人間だと言えようか。『今昔物語集』巻四第24話に登場するのは、そんな種類の透明人間なのである。

なお、『透明人間は204号室の夢を見る』では、透明人間になって204号室に侵入した実緒が、性欲に衝き動かされ、眠っている春臣の唇に自らの唇を重ねるばかりか、春臣に跨がって、

a ずりずりと後退し、跨がる位置を胸元から股間部へと移す。他人の服を脱がせられないことが悔やまれた。その憂さを晴らすように、自分の恥部を春臣の股間へと沈ませる。

(43頁)

という行為に及ぶ。女の透明人間が男を犯すというのは、古くは『有明けの別れ』における男装の女右大将が身を隠して次々と情事を目撃し、近くは昭和二十三年（一九四八）の香山滋『白蛾』に登場する保護色式の女透明人間が知り合いの男にいどみかかり同衾するのを想起させたりはするが、古来極めて希有なる筋書であるに違いなく、右に述べたのと同様の発想・趣向を、通常とは違う男女逆転させた形で盛り込んだものと捉えられよう。^③

二 悲嘆する不可逆性透明人間

特に注目される、もう一方の『今昔物語集』卷十六第32話は、「我が国には珍しい型であるが、讎讐種とばかりはきまらない」（折口信夫「餓鬼阿弥誕生譚」全集2）「部分的には多少の関連が予想される説話もあるが、全体としては他に類話をみない奇譚である」（日本古典文学全集・当該話解説）とされ、今のところ『今昔物語集』にしか見出されていない説話である。大晦日に一条戻橋で百鬼夜行に出くわした男の話。

……其後、男、不被殺ズ成ヌル事ヲ喜テ、心地違ヒ頭ヲ痛ケレドモ、念ジテ、「疾ク家ニ行テ、有ツル様ヲモ妻ニ語ラム」ト思テ、忽ギ行テ家ニ入タルニ、妻モ子モ皆男ヲ見レドモ、物モ不云懸ズ。亦、男物云懸レドモ、妻子答ヘモ不為ズ。然レバ、男、奇異ト思ヒテ近ク寄タレドモ、傍二人有レドモ有トモ不思議。其ノ時ニ、男心得ル様、「早ウ、鬼共ノ我ニ唾ヲ吐キ懸ツルニ依テ、我ガ身ノ隠レニケルニコソ有ケレ」ト思フニ、悲キ事無限シ。我ハ人見ル事本ノ如シ。亦、人ノ云事ヲモ障無ク聞ク。人ハ我ガ形ヲモ不見ズ、音ヲモ不聞ズ。

急ぎ自宅に帰った際の妻子の様子などから、鬼どもが吐きかけた唾によって自らが透明人間になっているに違いない（実線部）、とそう気付いて、男は「悲キ事無限シ」（破線部）という状態に陥っている。しかし、自らが透明人間化しているからといって、単にそのことだけで男が悲嘆に暮れているわけではない。例えば西教寺所蔵『因縁抄』（古典文庫）第20話でも、道端に横たわっていた鬼の死体から蓑と笠をはぎ取って着用した男が、「知人ニ行合、或ハ家ニ行タレトモ、誰モ何共不レ云。又、他人ノ家ヘ行タレトモ、家主モ不レ知」と、右の男が自宅に戻った時と同様の状況に直面する。そして、やはり同様に、「鬼ノ持タル隠蓑・隠笠」によって、自らが透明人間化しているのだと気付くに至る。しかし、こちらの男には悲哀の情など何ら生じてはいない。それどころが、「他ノ物ヲ取ル。又、他家ニ有ル物ヲ取ニモ、人不知。如此ル程ニ、

財宝充滿キリ」と、自分の姿が他人からは見えないうことをいいことに、すぐさま盗みを繰り返して大金持ちになっている。

『因縁抄』が「鬼ヲ持タル隠蓑隠笠」と記し、それらを「鬼神ノ二宝」とすることにについては、知られる通り、例えば、『保元物語』（新日本古典文学大系 卷下に「鬼持ナル隠蓑、隠笠、ウチデノ履、シヅム履ト云物共」、天正狂言本『たからかひ』（金井清光『天正狂言本全釈』）に「ほうらひの嶋なる、く、鬼の以たからは、かくれみぬにかくれ笠、打てのこつち、……」とあって、人々が広く認識するところであつたろう。では、同じく鬼の所有物「唾と蓑笠」によつて思いがけず透明人間になつた二人の男の、一体どこに違いがあるのか。それは明白であらう。『因縁抄』の男の場合、はぎ取つて着用した隠れ蓑と隠れ笠を脱ぎさえすればいつでも元の姿に戻れるのであつて、当然、この男もそのことを知つているに違ひない。自在に透明人間になつたり戻つたりする手段を手に入れたこの男は、盗みを繰り返すことになる。それに対して、『今昔物語集』の男の場合は、鬼の唾が原因となつて透明人間化したのだと気付いていても、元に戻る方法を何ら知り得ない。元に戻れない、言わば不可逆性透明人間になつているのである。結果、『因縁抄』の男とは違い、妻子をはじめとする誰にも自らの存在を認識されないという孤独感あるいは疎外感に苛まれて、悲嘆に暮れているのだらう。⁵ 右のあと、男は、元の姿を取り戻そうと、ひたすら六角堂の観音にすがり付くことになる。

先に見た通り、『大般若波羅蜜多經』卷五百九十二に登場する男も、隠形薬とともに顕形薬も入手したうえで、隠形薬を服して王宮に入り、好き放題に王妃と交わる。プラトン『国家』に登場する羊飼ひギュゲスも、姿を隠す手段とともに姿を顕わす手段を入手して、王妃と通じる。いずれの男も、姿を取り戻す手段を確保したうえで、悪事に走つている。自由に元通りの姿に戻れるという保証がなければ、いつでも元通り人間社会に復帰できるという確信が持てなければ、透明人間の心中に湧き起ころのは、窃盗であれ強姦であれ、何かの悪事をなそうとする欲心であるよりまず、誰にも通常通り自分の存在が認識されなくなつてしまつたことによる悲哀あるいは恐怖の方であらう。同じ透明人間で

あっても、不可逆性透明人間の場合、その心理は、他の可逆性透明人間とは大きく異なることになるのである。

安部公房『壁』第二部「バベルの塔の狸」（安部公房全集2）において、「とらぬ狸」に影をはぎ取られて透明人間となってしまった男が元の姿を取り戻そうとするのと、ほぼ同様である。その『壁』第二部にも、

もとに戻ることが可能なら、透明になるのは一寸も不都合じゃない。むしろ興味あることだ。たのしいくらいだ。と見える。やはり、逆に言えば、「もとに戻ること」が不可能な不可逆性透明人間では、「不都合」ばかりで、「たのしい」どころではないのである。それは、『壁』第二部の男でも『今昔物語集』巻十六第32話の男でも同じに違いない。

三 悲哀の演出

『今昔物語集』巻十六第32話の透明人間は、元に戻れないというだけでなく、通常の透明人間とは異なる性格をさらに付与されているように思われる。

鬼に唾を吐きかけられた男が自宅に帰った際の妻子の反応の中に、「男物云懸レドモ、妻子答へモ不為ズ」（二重実線部）というものがあり、それと対応して「人ハ我ガ形ヲモ不見ズ、音ヲモ不聞ズ」（波線部）と記述されている。男は、「形」が見えないだけでなく、その「音」も周囲の人間から感知されなくなっているのである。両者が連動する一連の現象であることは、六角堂観音の計らいによって「男真蹟二成」った直後のこととして、『此ハ何ナル事ゾ』ト問へバ、男事ノ有様ヲ有ノマ、ニ初ヨリ語ル。人皆此レヲ聞テ、『希有也』ト思フ」と記されることによっても、すなわち、男の姿がすっかり見えるようになったと同時に、男の声も周囲の人々に聞かれていないことによっても、確認し得る。このように、男が姿だけでなく同時に声をも感知されない状態になっていることについては、諸注ともにあまり注意していな

いように思われるが、見過ごすわけにはいくまい。

そもそも、姿は見えないけれどもその声は聞こえる、というのが、透明人間に対する通常の理解であろう。例えば、『風葉和歌集』に引載された散佚物語『隠れ蓑』の逸文では、隠れ蓑を着た左大将が、伊勢太神宮のお告げと思わせて、大式まさかぬの耳に戒めの言葉を吹き込んだりするし、『有明の別れ』の女右大将も隠形の状態で三条の女に歌を詠みかたりする。隠れ蓑を着けるなどして透明人間になっても、普通の人間と同じようにその声は聞こえるのだという理解が共通のものとしてあつてこそ、成り立つ趣向であるに違いない。また、『愚管抄』（日本古典文学大系）巻三醍醐には、『隠形ノ法ナド成就シタル人』であつたらしく、貞信公が仁王会の際、「コエバカリニテヲコナヒ給テ、身ハ人ニミエ給ハザリケリ」、すなわち身体は見えないが声だけは聞こえるという状態であつた、と記す。あるいは、先に触れた『大般若波羅蜜多經』の男も、隠形薬を服し透明人間になつたうえで、王に語りかけており、『千一夜物語』第八四三夜「第三の狂人の物語」に登場する男も、透明人間になつて王女の寢所に入り込んだ際、叫び声をあげて王女を半ば目覚めさせている。姿は見えずとも声は聞こえるというのが、『今昔物語集』の時代の日本に限らず、透明人間に対して広く行われた一般的な理解であると言えよう。『日本国語大辞典』第二版「透明人間」項も、「姿・形が目に見えず、声だけ聞こえるという、SFなどに登場する空想上の人間」と記す。

『今昔物語集』の透明人間は、声が届かないということ以外に、さらにもう一つ通常とは異なる性格を持つていたかもしれない。男が家に帰つた際、妻子が男を見ても何も話しかけることなく、男の方から話しかけても返事もしないの、男は不思議に思つて近寄つたけれども、妻子は「傍二人有レドモ有トモ不思議」という様子であつたという（先引二重波線部）。それで男は、「我が身ノ隠レニケルニコソ有ケレ」（先引実線部）と、自らの身体の方に異常が生じていたことに気付くのである。ただ、「傍二人有レドモ有トモ不思議」という妻子の無反応は、基本的には男の姿が見えな

いために生じたものであろうが、それだけが原因ではないのではないかと思われる。たとえ姿は見えなくても、人が近くに寄れば気配くらいは感じられてもおかしくないはずだからである。

そう言えば、六角堂観音の夢告に従い、「神ノ眷属」という「牛飼童ノ糸怖気ナル」に付いて行った際、男が童に手を引かれて「扉ノ迫ノ人可通クモ無キ」から中に入っている。「神ノ眷属」に伴われていたために通れるはずのない隙間から入れたということなのかもしれないが、そうでないとすれば、男の身体が、単に透明になるだけでなく、さらに尋常とは異なって、質量を失いあたかも空気の如き存在と化していたということが考えられるところだろう。その場合なら、男が妻子に近寄っても、その気配すら感じられないに違いない。

あるいは、『日本霊異記』（新日本古典文学大系）巻下第38話は、景戒の霊魂が自らの遺体を焼くという、景戒が見た奇妙な夢について記すが、景戒の霊魂が傍にいた人に叫んでも、その声は空しくて相手は何も返答してくれず、そこで景戒があれこれ考えて思い至ったのが、「死人之神者無_レ音、故我叫語之音不_レ聞也」ということだった、という。身体から離れた霊魂には声がなく、その声が人に届くことはないというこの理解に基づけば、『今昔物語集』巻十六第32話の男の声が人に届かなくなつたのも、その男がほとんど霊魂だけで身体を失つたような状態になっていたことを裏付ける現象だと捉えることもできるだろうか。

このように男の身体が質量を失い実体を伴わないものになっていたとすると、それもやはり、通常の透明人間とは異なることになる。例えば、『今昔物語集』巻四第24話では、透明人間となつた龍樹ら三人のうち二人は、王宮に忍び込んだ際に、王が隙間なく蒔かせた粉のために足跡が付き、切り殺されてしまう。いくら身体は隠れて見えなくても、粉によつて足跡が付くような、質量ある通常の身体を備えているというのが、透明人間に対する通常の理解であつたに違いあるまい。王宮にて龍樹らに犯された后たちも「近来形ハ不見又者ノ寄り来テ触_レハナム有ル」と訴えており、透明

人間たちの身体を実感している。そうした理解は、近代以降においても同様で、例えば、草野唯雄『透明願望』（『小説宝石』昭和五十一年十一月）は、「その手が、不意に何かにつき当たった。温かくて弾力のあるものだった。私はギョッとして手をひっこめた。どう考えてもそれは人間の皮膚感であった。……だが、そんなはずはない。そこは何もないただの空間なのだ。薄暗い道路の遠景も、完全に見通すことができる」と、透明人間に触れた際の感触を具体的に描いている。また、透明人間はしばしば、包帯をぐるぐる巻きにした姿で表されるが、姿は見えずとも実体があるからこそ包帯を巻くことができるのに違いない。

『今昔物語集』巻四第24話は、龍樹らの造った「隠形ノ葉」の効能について、『龍樹菩薩伝』など海外の文献には見られない要素だが、「隠蓑ト云ラム物ノ様ニ形ヲ隠シテ、人見ル事無シ」と、わざわざ隠れ蓑を持ち出して説く。同文的な『古本説話集』（新日本古典文学大系）巻下第63話も同様に説くうえに、さらに、「隠形ノ葉」を「隠れ蓑の葉」と記すし、標題自体も「竜樹菩薩先生以_二隠蓑笠_一犯_二后妃_一事」とする。平公誠に「隠れ蓑隠れ笠」をも得てし哉きたりと人に知られざるべく」（『拾遺和歌集』巻十八雑賀・一一九二、新日本古典文学大系）という歌があり、散佚物語『隠れ蓑』のあったことも知られている。また、『枕草子』（三巻本、新日本古典文学大系）第百段は、隔てとしていた屏風を押し開けられて姿が現れたことを、「隠蓑とられたる心ちして」と喩えている。『宝物集』（新日本古典文学大系）は「人の身には隠蓑と申物こそ能宝にては侍りぬべけれ」と記すし、『有明けの別れ』（全対訳日本古典新書）巻一には「そぞろに身をかくすことなんおはする。かくれみのなどいひけんやうに、いたらぬさとなくまぎれありきたまふ」、松浦宮物語（新編日本古典文学全集）巻二には「隠れ蓑のためしにやとまで探れど、跡かたも知られず」と見える。「隠形」するための道具として、当時の日本では、隠れ蓑（あるいは隠れ笠）が最も馴染みあるものであったに違いない。それは、脱げばすぐに元の姿に戻れるし、着けている時も、姿は見えなくても声は聞こえ、実体としての身体を伴ってもいよう。

隠れ蓑によるそういう透明人間が一般的であったなかで、右に見た通りだとすれば、『今昔物語集』巻十六第32話は、それとは大きく性格の異なる「隱形男」(先引標題)透明人間を現出していることになる。同じくもとは鬼の所有物であっても、隠れ蓑とは異なる唾というものの持つ強い威力の結果ということでもあろうか。

先の龍樹説話をより早く載せる『龍樹菩薩伝』や『法苑珠林』巻五十三では、「細土」を蒔けば、「若是方術其跡自現、設鬼魅入必無^三其跡」(『法苑珠林』)、すなわち、人間が方術によって透明になっているなら足跡が現れ、もし鬼魅の仕業なら足跡が付かないだろう、と述べてもいる。前者が通常の透明人間の場合であって、鬼に唾を吐きかけられた男が、そもそも身体を失ったが如き状態になっていたとすると恐らく足跡は付かず、右の分類に従えば、もはや通常の人間でさえなく、先の『日本霊異記』に言う靈魂とも近いだろうが、鬼魅と同様の状態になっていたことになる。

身体が透明になって元に戻れなくても、声が出せれば、あるいは実体としての身体があって気配を感じさせたり触れたりすることができれば、自らの存在さらには意志を他者に知らせることも可能だろう。『今昔物語集』巻十六第32話は、思いがけず透明人間になってしまつて元に戻ることのできない男から、通常の、あるいは従来^四の透明人間が有するそれらをも奪つて、その男の悲哀を、より効果的に演出しているのではないかと見られるのである。

四 「夢を見る」ための設定

『透明人間は204号室の夢を見る』にも、透明人間の声についての記述が、

b 臉の縁には二重の線が鮮明に走り、睫毛は長い。波打つ髪の間から覗く耳は、耳たぶが小さく薄かった。肌は白くきめ細かで、ニキビ跡の一つもない。それが実緒の春臣だった。きれいな人。透明な声で吹き、自分の唇を春臣の唇に近づける。

と見える。透明人間になって204号室に入り込み、性欲のままに春臣に跨がった際のことである。実緒は、春臣の顔を間近に見つめ、「透明な声」で呟いている。身体が透明なだけでなく、声も透明になっているようである。すなわち、「ハ我ガ形ヲモ不見ズ、音ヲモ不聞ズ」(先引波線部)という『今昔物語集』卷十六第32話の男と同じである。

また、実緒が透明人間になる場面、あるいは実緒が透明人間になって春臣の部屋を訪れる場面において、次のような記述が見られる。

c 頬からはシートの肌触りが消え、全身からは骨と肉の重みが失せる。顔のあつた場所に手を運んでも、もうなんの感触も得られない。手が頭部を通り抜けていくイメージだけが、鮮烈に脳裏に浮かぶ。(10頁)

d 眼まなこを開ける。目の前に手をかざす。爪も指も、とてもきれいに透けている。玄関のドアをすり抜け、外に出た。……時折強い風が吹いたが、空気の流れは実緒の身体をやすやすと通過していった。(11頁)

e 十七分ほど歩くと、都内有数の乗降客数を誇る駅に到着する。人が引ひつ切りなしに出入りしているが、誰一人自分には気きづかない。正面から来る人を避けなくても、まっすぐに足を動かせば、最短距離で目的地まで辿り着けた。(11頁)

f ドアが開く前に、車体を通して電車に乗り込んだ。中の混雑も実緒には関係ない。(12頁)

g 春のぬるい空気の中、マンションは白いタイルを燦然さんぜんと光らせ建っていた。ガラス扉に腕を伸ばしてみる。手はなにかからも遮られることなく、あっさり扉を通り抜けた。もちろん、オートロックも容易に通過し、二階へと続く階段を探した。(12頁)

h 全身の力を抜き、深呼吸を五つして、自分の身体が透けていく様子を思い浮かべた。玄関のドアをすり抜ける実緒は、なにも着ていない。(40頁)

i 日差しや風は身体を通過するが、実緒が動けば髪や性毛は柔らかく揺れる。肉の重みはまったく感じず、全身はまるで昏々こんこんと眠ったあとのように軽い。(41頁)

j エントランスから春臣の部屋までの道筋も、実緒の中では固まっている。自動ドアを抜けてすぐのところは階段があり、それを上がって右手に曲がる。一番奥が204号室だ。部屋番号のプレートに記名はないが、このドアの奥に春臣がいるのは間違いない。頭からするりと入った。玄関のたたきには白いスニーカーがあった。(41頁)

k オートロックを通過し、階段をふわふわ上がって二階に行く。玄関のドアを抜けると、スニーカーの横には黒いパンプスがあった。(80頁)

透明人間・実緒は、実緒の住む部屋の玄関のドアも(d h)、電車のドアどころか車体も(f)、春臣の住むマンションのエントランスのガラス扉も(g)、その先のオートロックの自動ドアも(g j k)、春臣の部屋の玄関のドアも(j k)、全てすり抜けている。また、他者の身体も通り抜けている(e 実線部)。それは、『今昔物語集』巻十六第32話の男が先述通り、牛飼童に手を引かれて、人がとても通れないような扉の隙間から中に入ったのと、近似する。多くの人とすれ違っても誰一人として実緒に気付かない(e 波線部)というのも、恐らく姿が見えないからというだけではなく気配も何もないからであって、その点も、『今昔物語集』巻十六第32話の男について、「男、奇異ト思ヒテ近ク寄タレドモ、傍二人有レドモ有トモ不思議」(先引二重波線部)と描かれていたのと、近いものがある。

実緒には「骨と肉の重み」(c 実線部)「肉の重み」(h 実線部) 質量もなくて、顔の部分に手を運んでも何の感触も得られず(c)、空気の流れが身体の中を通過している(d)。実緒の身体は、通常の透明人間のように存在していないのに違いない。つまり、

「玄関のたたきには白いスニーカーがあった。左右はびったり揃えられ、壁に踵かかとをつけて置かれている。春臣は脱

ぎ散らかすような人ではないのだ。実体がないのだから踏んでも問題ないと分かりつつ、靴を避けてかまちに上がった。
(41～42頁)

m 実緒はおずおずと春臣の胸元に跨またがった。実緒の臀部が春臣の肉感を捉えることはない。中腰で浮いているのと同じだった。彼の胸板は厚いのか薄いのか、体温は高いのか低いのか、実体のない身体では分からない。

(42～43頁)

と明記される通り、実体がないということである。実体がないから、声帯が機能することなく声も透明になり、ドアなどをすり抜け、気配も消えるのだろう。透明人間となった実緒が性欲のままに春臣に跨またがった際、その服を脱がせようとしてもできなかった(先引 a 実線部) というのも、実緒の身体が実体を伴っていないからに違いあるまい。『今昔物語集』巻十六第32話の男は、この実緒に近い状態になっているのかと見られる。

通常の透明人間のように実体を有しては、春臣の住むマンシヨンのオートロックのドアを通り抜けることはできないし、施錠されていれば春臣の部屋のドアについても同様であるし、施錠されていなくても、ドアを開けると春臣に気付かれるかもしれない。また、春臣の部屋に入れたとしても、気配に勘付かれるかもしれない。こっそりと、眠っている春臣の唇に自らの唇を重ねることも、春臣に跨またがることも、かなり難しいであろう。あるいは、マンシヨンに至る以前に、駅や電車の車内で多くの人に不審がられても不思議ではない。通常とは異なる、実体がないというあり方は、実緒という透明人間が「204号室の夢を見る」ために必要不可欠な設定であるに違いない。

しかし、「よく考えれば春臣の部屋に入ったことは一度もなく、頭に現れた光景は、妄想の産物でしかない」(117頁)と記される通り、右はすべて実緒の妄想の中のことであって、現実でのことではない。だからこそ、通常とは異なる、右のような実体のない透明人間という設定であっても、読者に殊更に違和感を与えることがないのでろうし、妄想の中

の透明人間には、意識だけで実体がないというあり方の方が、むしろ相応しくさえ感じられよう。

『今昔物語集』巻十六第32話の男の場合、その点は実緒と違う。妄想の中で透明人間と化しているわけではなく現実世界で、同じように、声も通じない実体を失ったかのような透明人間になっているのである。妄想なら覚醒することによって、そうした透明人間状態から解放されることになろうが、この男には無論そういう道もなく、その状態が生み出す極度の悲哀あるいは恐怖に包まれながら、六角堂観音にすがりに行くしかないのに違いない。

五 拡散する不可逆性透明人間

『今昔物語集』巻十六第32話に登場するような、自由意志に従って元に戻ることができず、あるいは透明状態から脱却することができず、多くの場合は悲哀や恐怖を感じ苦悩するという透明人間を、改めて「不可逆性透明人間」と規定するならば、そうした不可逆性透明人間が次々と出現してくるようになる、その一つの大きな契機を作ったのは、イギリスのH・G・ウェルズによる一八九七年刊行の『透明人間』(The Invisible Man 岩波文庫、橋本横矩訳)であるらしい。

自ら開発した方法で透明人間となった科学者のグリフィンが、恐怖政治をうち立て町を支配しようとするが失敗し、ついに捕らえられ死んでしまう、という筋書。第二三章「ドルアリー・レインにて」において、大学時代に同級生であった科学者のケンブに「君はどうしてアイビングへ行っただの？」と訊かれて、

研究をしに行ったのだ。ある希望を持っていたのだ。思いつきにすぎなかったが今でも棄ててはいない。もとの身体に戻れる方法を研究したかったのだ。透明人間としてやりたいことを終えたらもとに戻れる方法をね。

と返答しているように、グリフィンは、透明人間になったものの、もとに戻る方法までは獲得していなかったのである。

グリフィンはまだ、右の直前にケンプに、

ケンプ、考えれば考えるほど透明人間なんて馬鹿々々しいものに思えてきたよ。寒いやかな気候のときに人の多い大都会にいとね。この気持ちがいじみた経験をする前は、いろいろなことを夢想したものだ。しかしその日の午後は全く意気消沈していた。私は人の望み得るいろいろなものを数えあげてみた。疑いもなくそれらは簡単に手に入るだろうが、手に入れたものを堪能することはできなかった。野心や名誉も姿が見えないのでは何になる、結局は裏切るデリラのような美女の愛を得たとしても何になる？ 私は政治、慈善、スポーツには関心がない。いたい何をしたらよいのだ！ こんなつまらぬことのために私は包帯の化け物、滑稽な男になったのか！

と語っているが、透明人間になる方法とともに元に戻る方法を獲得していれば、このように嘆くことはなかったに違いない。グリフィンが元の姿を取り戻したのは、捕まって死んだ、その直後のことだった。例えば先掲雨宮著書も「ウェルズの物語に登場するのは、透明になったことで何でもできる無敵の存在……ではなく、透明から一生戻れない恐怖に苛まれる一人の科学者の姿だった」（30頁）と述べるように、グリフィンは、不可逆性透明人間になっていたのである。このウェルズ『透明人間』は、それを「嚙矢こやしとして、文学的想像力はこれまでさまざま透明人間の姿を生みだしてきた。そうした系譜をたどっていけば、まさしくひとつの『透明人間の文学史』が描けることだろう」とも評される作品であり、日本でも映画化されるなどした、SF小説の有名な古典である。その刊行後に不可逆性透明人間が、例えば次の通り、相次いで現れている。

昭和三年（一九二八）の植尾栄『透明の人間』（『キング』昭和三年十一月号）は、右のウェルズ作品の明白な影響があるいは模倣作。研究によって透明人間となった科学者が、しかし元に戻ることができず悲嘆したすえに、自殺することで身体の変え元の姿を取り戻すという「悲しい成功」を収める。先に触れた昭和二十三年（一九四八）の

香山滋『白蛾』の女透明人間も元に戻れなくなっている。昭和二十四年（一九四九）の大映映画『透明人間現わる』は、元に戻す還元薬がないのにと信じ込まされたまま、黒川という男が透明人間、つまりは不可逆性透明人間となり、犯罪をするよう仕向けられる。最後は銃撃されて死に、そして姿が現れる。昭和二十九年（一九五四）の東宝映画『透明人間』にも、戦時中に特攻隊として不可逆性透明人間にされた男が登場する。昭和二十六年（一九五二）の安部公房『壁』第二部「バベルの塔の狸」では、公園で奇妙な動物、実はバベルの塔からやって来た「とらぬ狸」に影をはぎ取られ、透明人間になってしまう。そして、何とか元の姿を取り戻そうとする。昭和五十一年（一九七六）～昭和五十二年（一九七七）のモンキー・パンチの漫画『透明紳士』（『週刊少年キング』）では、悪の軍団に透明人間にされた男が元の姿を取り戻すために戦うし、平成十年（一九九八）放映のテレビドラマ『透明少女エア』では何者かによって透明にされた少女が元に戻る方法を探す。一九八七年のH・F・セイント『透明人間の告白』（*Memoirs of an Invisible Man*）の場合、主人公の男が科学実験施設の爆発に巻き込まれて不可逆性透明人間になる。二〇〇〇年のアメリカ映画『インビジブル』（原題 *Hollow Man*）はウェルズ作品を原案とするもので、やはり、科学者が透明人間になるが元に戻れず、凶暴化していく。

昭和三十三年（一九五八）の武田泰淳『透明人間』では、透明人間にさせられた男が、指示に従わなければ永久に元の姿に戻さないと行って脅される。男は指示に従うので薬によって元に戻るが、不可逆性透明人間というものへの恐怖が、右のような形で盛り込まれているのである。不可逆性透明人間の恐怖は、昭和二十六年（一九五二）の乱歩『透明怪人』（光文社文庫「江戸川乱歩全集」第16巻）も、トリックによって透明人間にされた「大友君」をめぐって、「大友君は、もう二」と、もとのすがたには、なれません。一生、目に見えない人間として、くらさなければならぬのです。世の中に、こんなおそろしいことが、またとあるでしょうか」と記している。

例えば、島田雅彦『透明人間の夢』（『暗黒寓話集』〈文芸春秋、平26〉による）の登場人物が「手切れのカネを同封しておく。戸籍と住民票を売ったカネの半分だ。オレはもう書類上はこの世に存在しない。願いが叶って、透明人間になれたというわけだ」と書き置くが、そのような比喩的な意味の「透明人間」も少なくない。この登場人物ももう元に戻ることとはできないのだろうが、比喩的な透明人間にも不可逆性のものが様々に見られる。アメリカのラルフ・エリソンによる一九五二年の『見えない人間』(Invisible Man)は、黒人を見えない人間⇨透明人間に喩える。過酷な人種差別のため、黒人が社会から疎外されて存在そのものが無化していることを、比喩しているのである。この比喩としての透明人間も、透明状態の現状から脱却できず苦悩するような不可逆性透明人間であると捉えてよからう。また、昭和三十五年（一九六〇）の平林たい子『透明人間』（『平林たい子全集』第八巻）は、「こうして、私の存在は、生きたまままだんだん社会から薄れて行きました。私は透明人間になって行きました」と結ばれる。この「透明人間」も恐らくは、比喩的な不可逆性透明人間と言うべきものに極めて近い存在であろう。

『透明人間は204号室の夢を見る』は、性欲に衝き動かされて、眠っている春臣に跨がり自らの恥部を春臣の股間へと沈ませたと、妄想の中で透明人間・実緒を描いていたが（先引a）、それに続いては、

n 腰を振ると、脳の温度はさらに上がった。動きはひとりでに激しさを増していく。身のほどをわきまえろよ。同級生の声^が聞こえる。なにかを叫びたかったが、でも、なんと言つたらいいのかわからない。実緒は息^が切れて身体が動かなくなるまで、縦に横に、盛んに腰を揺らした。 (43頁)

と、腰の動きを激しくさせる実緒を描く。その中に「息が切れて身体が動かなくなる」（実線部）と見えるのは、右のnあるいはaの少し前、「春臣に会いに行こう」（41頁）と、妄想の中で実緒が透明人間となった場面であるiの直後に、「実緒は駆け出した。景色が後方へと流れていく。どれだけ走っても息は切れなかった」（41頁）と記されているのと、

符合しない。その点を踏まえるならば、右のnの実線部前後の実緒は最早、息が切れることのない妄想中の透明人間・実緒ではなく、春臣との情事を妄想しながら自慰行為に耽る現実世界の実緒なのであろう。例えば、

○想像と、誰とも共有できない現実のあいだには、違いも差もないのではないかとふと思う。書店で見た春臣が現実で、透明人間になって犯した春臣が想像のものとは、誰にも証明できない。実緒の中には同じような感覚で収まっている。もう本人にすら、分別不可能なのだ。(90頁)

と見えるように、実緒は妄想世界と現実世界を往還し両者を一体化させているようだ。

実緒が透明人間になるのも、実は、妄想世界においてだけではなかった。「私はとつとくに、ずつと、ずうつと前から透明人間だったんだ」(35頁)「私に服なんていらぬ」(同上)「自分は透明人間だ。どうせ誰も自分を見ない、誰からも見えやしない」(36頁)と考え、自室では夏、全裸で過ごす。「裸で生活していれば、当然面倒なこともある。……しかし、これこそが本来あるべき姿なのだ。透明人間が服を着てどうするのか」(37頁)「自分は透明人間で、全裸が本来あるべき姿だと思っていたはずだ。それを月経くらいで簡単に撤回していいものか」(71頁)とも見える。現実世界においても透明人間として振る舞っているのである。末尾部において実緒は、「自分は透明人間だと思ひ込む人」を「書きたいと編集者に告げるが(183頁)」、「自分は透明人間だと思ひ込む人」とは実緒自身に違いなく、そういう人の話を書いたのが、他ならぬ本作『透明人間は204号室の夢を見る』であるのだろう。

では、そもそも実緒はなぜ、そんなに透明人間になるのか、自分を透明人間だと思ひ込むのか。「身のほどをわきましろよ」(先引n破線部)という同級生の声は、実緒が「小学生のころ、クラスで一番華やかな女子と同じペンケースを買って机上に出した際に「隣の席の男子」が呟いた言葉なのだが(13頁)、その頃の実緒はもう、「おどおどしていた挙動は、コミュニケーションが不得手だと自覚してからさらに不審気味になり、分かりやすくいじめられるというよ

りは、触れてはならないものとして扱われ続けた「学校生活」を送っていたようだ（19頁）。さらに、

Pかなり幼いころから、実緒は恋愛や結婚に対して見切りをつけていた。そういうものは、休み時間は校庭で遊び、体育祭や文化祭を心待ちにできる子にのみ訪れるイベントで、ただ教師の話を聴くだけの、退屈な授業のあいだが一番平穩でいられる人間には関係ない。だいたい、友だちという唯一無二でなくともいい関係すら結べないのに、
一対一の人間関係など絶望的だと思っていた。（40頁）

Q書くことを仕事にするより、友だちと学校生活を送ってみたかったです。……少し大人になってからは、花見とカ海とかスキーと一緒に行くんです。友だちの取り立ての免許で。あ、温泉もいいな。……そういうことでは、
の人生を、本当は送りたいかのように思うんです。でも無理だったから。叶わなかったから。誰とも話さないと、一日ってすごくすごく長いんです。昼休みも放課後も、本当に果てしないんです。

（いづみとの会話の中での実緒の発言 62～63頁）

といった記述が随所に見出されるように、実緒は、幼少期よりずっと、コミュニケーション能力が極端に低く、孤独を極めていた。そういう自分を、「どうせ誰も自分を見ない、誰からも見えやしない」「透明人間」（36頁）だと思いつている。そして、その状況から長らく脱却できず苦悩している。まさに、比喩的な不可逆性透明人間である。そのことを十分に自覚しつつ、実緒は、妄想の世界でも透明人間となり、現実世界においては実際の透明人間として振る舞ったりもしているのだろう。

以上のように、恐らくはウェルズ『透明人間』を一つの契機として、以降、不可逆性透明人間が、SFに止まらず諸作品へと拡散していき、ごく最近の『透明人間は204号室の夢を見る』にまで入り込むに至っているのである。

六 孤立する不可逆性透明人間

逆に、ウエルズ『透明人間』より遡って不可逆性透明人間を探索するに、と言っても十分に探索し得ているわけでは全然ないけれども、ウエルズ作品と同様の不可逆性透明人間が登場し、ウエルズ作品との関係が注意されている。一八八一年アメリカのE・P・ミッチェル『水晶人間』(The Crystal Man)を除いて、なかなか見当たらない。そして、それら作品から七百年以上前の『今昔物語集』に至ってようやく、先述通り、その悲哀を効果的に演出されたような不可逆性透明人間を見出すことができるのである。また、それよりさらに遡って求めてみても、今のところ管見に入らない。

散逸物語『隠れ蓑』の左大将など、隠れ蓑や隠れ笠のような着脱可能な道具を着用して透明人間になる場合は、ハデスの兜やハリ・ポッターの透明マントあるいはドラえもんのかくれん棒もそうであるように、先にも述べたが、その道具を外せば元に戻るのだから、不可逆性透明人間ではあり得まい。これまでに取り上げたうちでは、『因縁抄』や『好色赤烏帽子』『浮世栄花一代男』の事例がそうである。また、龍樹説話の場合も、「寄生ヲ五寸二切テ陰干ニ百日干テ」「其ノ木ヲ髻ニ持シツレバ」「人見ル事無シ」(『今昔物語集』巻四第24話)ということなのだから、「其ノ木」を外せば元に戻るのだろう。実際、諸書記載の龍樹説話において不可逆性に言及されることもない。『風流志道軒伝』(日本古典文学大系)巻四でも、仙術を込めた「羽扇を背に負へば、忽に影ぼうしもなく、水鏡も見え」なくなるというのだから、逆にその羽扇を背から外せば元の姿に戻るのだろう。その他、狂言『居杭』では、清水観音から授かった隠れ頭巾を着脱しては、姿を消したり現したりしている。

『今昔物語集』巻二十四第16話の場合、陰陽師の賀茂忠行が「鬼ノ来ルヲ見テ、術法ヲ以テ忽ニ我が身ヲモ恐レ無ク、

共ノ者共ヲモ隠シ、平カニ過ニケル」と、何らかの「術法」によって透明人間化しているが、やはり不可逆性が問題になつてゐるわけではない。『江談抄』（新日本古典文学大系）巻三などに見える、「隱身の封を作し」た吉備真備の場合や、先引『愚管抄』に見える、「隱形ノ法ナド成就シタル」貞信公の場合、『沙石集』（新編日本古典文学全集）巻九に見える、「隱形の印」の結び方を天狗から教つた真言師の場合、『三国伝記』（三弥井書店刊「中世の文学」）巻六第6話に見える、「摩利支天ノ秘法ヲ伝ヘ陰形ノ術ヲ修シ」た佐々木頼綱の場合、なども同じである。

『雨月物語』巻五「青頭巾」の快庵禪師は夜中に見えなくなるが、朝日とともに姿を現す。かくや姫もまた、「きと影になりぬ。……もとのかたちに成ぬ」（『竹取物語』新日本古典文学大系）と、影のようになるが、すぐに元に戻つて、不可逆性透明人間というわけでは全然ない。もつとも、「月の都の人」であるかくや姫の場合は、小論が基本的に想定している「透明人間」（通常の人間が、何らかの原因あるいは方法によって、その姿を透明化させたもの）の範疇からそもそも外れる存在でもある。先に触れた『有明けの別れ』の女右大将も、不可逆性透明人間では全くないし、もとは天女だというのだから、かくや姫の場合と同様に本来「透明人間」という枠から外れる面があるだろうか。陽勝仙人が、「其形不_レ見、只有_三其声_一」（『陽勝仙人伝』、『かがみ』2）という状態で、また、「如_レ影之者」（『古事談』巻二第78話、新日本古典文学大系）になつて、人間界にやつて来たというのは、少なくとも人間界においてはその状態のまま姿を現すことはないのかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、かくや姫などとは違いもとは通常の人間であつたのが、最早そうではない神仙界の存在になつており、だからこそ右の如き状態と化しているのであつて、小稿の言う「不可逆性透明人間」とは性格が異なる。無論、陽勝仙人は全く悲哀も感じておらず、苦悩してもいない。龍樹説話を載せる『法苑珠林』巻五十三の先引記事が、姿が見えない存在を、人間が方術によって透明化したものと、鬼魅とに分類していたが、得仙した陽勝仙人は、後者に近い存在、あるいは散逸物語『隠れ蓑』の左大将が神のお告げを

装って言葉を掛けた、その神に近い存在と捉えられているように見受けられる。河原院大臣の近習の侍が得仙したあとに「如_レ景」くなくて出現したり（『本朝神仙伝』日本思想大系）、「仙人」が「其ノ体ヲ見得ル事無シ。只景ノ如クシテ飛ビ去」ったり（『今昔物語集』卷十二第38話）、仙人になった（『蓮心院殿古今集註』二七三番歌注）とか「仙人ノ化」（『弘安十年古今集歌注』中世古今集注釈書解題）だとか伝わる素性法師が「かげのやうなるもの」になって現れたり（『和歌童蒙抄』第二、日本歌学大系）した、それらも同様だろう。

海外の事例に至っては、ほとんど全く探索の手が及んでいないと言わざるを得ないが、やはり、現時点では不可逆性透明人間は見出せていない。先に挙げた事例のうち、『大般若波羅蜜多經』卷五百九十二の男やプラトン『国家』のギユゲスは、元に戻る方法を、姿を隠す方法と同時に得ているし、『ジャータカ』三九一の男や『千一夜物語』第八四三夜の男も特に不可逆性の透明人間ではないようである。中国の『神仙伝』（増訂漢魏叢書）卷三では、「行_二遁甲_一、能_二歩訣隱形_一」くした李仲甫が、「但聞_二其声_一、……但不_レ可_レ見」という状態になったと伝えるし、『搜神記』卷一は介琰が玄一無為の道を学んで変化・隱形の術を使えるようになった話、『新唐書』卷二百四列伝百二十九方技・張果伝は羅公遠が隱身術に通じていて玄宗皇帝から教授するよう請われたが十分には教えなかった話を載せるが、いずれもやはり不可逆性透明人間というわけではない。『抱朴子』（王明『抱朴子内篇校釈』）や『神仙伝』に散見する、「瞬時に姿を消しまた姿を現わす法」（東洋文庫512『抱朴子内篇』310頁）である「坐在立亡」や、『抱朴子』卷十五雜応に「服_二大隱符_一十日、欲_レ隱則左轉、欲_レ見則右回也」と見えるのも、明らかに不可逆性透明人間ではない。「隠れ蓑（マント）・隠れ笠（帽子）」は、人気のある昔話の趣向になっており、インドから西アジア、そして北アメリカのインディアンにまで広がっている」（『日本大百科全書』「隠れ蓑笠」小島璽禮執筆）とされるが、それら事例でも容易に元に戻るに違いあるまい。その他、石崎又造「支那笑話と狂言記・咄本三種」（『国語と国文学』昭和十三年四月号）や松山俊太郎「古代インド人のよそお

い(二十三) (二十七)」(『化粧文化』25 (平3 (5))、『日本昔話通観』研究篇1・2 (同朋舎、平5・10) に収集された、右に挙げた以外の海外の諸例でも、不可逆性透明人間と言えるものは見当らない。

ここにすべてを挙げることは無論できないけれども、⁽⁸⁾ 以上のように、ウエルズあるいはミッチェルより前の透明人間の事例の中には不可逆性透明人間の存在を確認し難いのである。そもそも海外の事例まで含め余すところなく探索し尽くすというのは稿者の能力を遙かに超えていて、甚だ心許ない限りであるのだが、空間的時間的に遍在する愛欲系透明人間とは対照的に、不可逆性透明人間は、ウエルズやミッチェル以降の近代に偏在する傾向を持つものであるとは認めたいだろうか。そうであるとすれば、小稿にて取り上げた『今昔物語集』卷十六第32話の男は、不可逆性透明人間として極端に孤立した存在であるということになる。

おわりに——透明人間文化史年表へ

『透明人間は204号室の夢を見る』の実緒は、比喻上の不可逆性透明人間と化して、非常な孤独感の中で生きつつ、そのことを自覚して自らを透明人間だと思ひ込む。そして、現実世界で実際に透明人間として振る舞ったり、実体を伴わない妄想世界においても男女が逆転した愛欲系透明人間となったりしていた。あるいは、掌編小説を書いている春臣の部屋の郵便受けにこっそりと投入する実緒は、春臣にとって無気味な透明人間でもあろう。また、「目に見えない本がある。書棚にあるその本を、誰も手に取らない。視線も向けない」(3頁) という書き出しは、実緒の分身と言ふべきデビュー作が不可逆性の透明状態に陥つて、実緒の不可逆性透明人間としてのあり方を暗示してもいよう。透明人間という素材を、様々に趣向を凝らしつつ重層的かつ多角的に盛り込んだこの作品は、透明人間文学としても新鮮で興味深いもの感じられる。

さて、その『透明人間は204号室の夢を見る』においても基点となっていると言うべき、不可逆性透明人間というものが、ずっと早く『今昔物語集』巻十六第32話に、その悲哀を効果的に演出されながら登場していた。前節には、後の時代に事例を見出し難く、それが極端に孤立した存在であった可能性を示しておいた。実際にその通りであるとすれば、同話の不可逆性透明人間は、近現代のものと同性格を異にする面を種々含んでいて、ウエルズ『透明人間』のように後代における不可逆性透明人間の拡散に影響するといったことが全くない、突然変異的なものであったとしても、透明人間の文化史上、時代を大きく先取りしたかの如き事例として大いに注目されるであろう。

前節に述べたことは、飽くまで現時点での不十分な探索に基づくものであって、今後すぐにでも、『今昔物語集』巻十六第32話以外に不可逆性透明人間の早い事例が次々と見出されることになるかもしれない。ただ、そうであっても、少なくとも『今昔物語集』以前には出現していないことがほぼ確認できたとしたら、そして、古典的な透明人間と近現代的な透明人間、日本やその周辺の透明人間とウエルズ作品を軸とする欧米の透明人間、それらが従来はバラバラに把握されてきた感が強いが、何時かそれらを総合して、「人類何千年の夢」の軌跡を辿った透明人間文化史年表といったものを作成し得る時が来たならば、その中に、左の一項が立てられないものかと思うのである。実緒の得意とする妄想の類かもしれないが……。

十二世紀前半 不可逆性透明人間あらわる！ (『今昔物語集』巻十六第32話 日本)

注

(1) この乱歩「透明の恐怖」のほか、後に取り上げる榎尾栄『透明の人間』、香山滋『白蛾』、草野唯雄『透明願望』は、

鮎川哲也編『透明人間大パーティー』（講談社文庫、昭60）に収載されてもいる。

(2) 小稿の扱う問題は、拙稿「透明仙人の足跡——狐の隠れ蓑を端緒に——」（『朱』59、平28）においても、その一部として取り上げた。小稿は、それを発展させたものである。

(3) 『有明けの別れ』の事例について、馬場淳子「『有明けの別れ』は『今隠れ蓑』か——『隠れ蓑』『狭衣物語』からの〈隠れ蓑〉モチーフの変容——」（『立教大学日本文学』85、平13）も、「名高い女性や他人の恋の駆け引きを見てみたいという願望は本来、男の側から発せられるものであるのに」「女の身でそれを行っている」と述べている。

(4) 馬場淳子「鬼と隠れ蓑」（『立教大学大学院日本文学論叢』3、平15）など参照。ただし、隠れ蓑や隠れ笠の所有者は後世、鬼に限らず拡大していくようである。天狗の隠れ蓑は昔話としてよく知られているし、室町物語『大黒舞』では、大黒天がそれらを授けている。また、狐の持つ隠れ蓑を着る昔話が熊本県人吉市で採取されており（『日本昔話通観』第24巻）、万治二年（一六五九）刊『百物語』所載の狐と山寺の法師の話は、既にその時点で、隠れ蓑の所有者に狐が加わっていることを推測させる面がある。

(5) 例えば大浦康介「透明人間の夢——SFと〈本当らしさ〉」（大浦編『フィクション論への誘い——文学・歴史・遊び・人間』世界思想社、平25）は、「透明人間として生きることが、食事や移動のさいの不自由や危険にも増して、心に重くのしかかる問題をともなっている。いうまでもなく疎外と孤独という問題である」と述べる。

(6) 以上の件について、注3・4の馬場論文など参照。

(7) 清水学『思想としての孤独（視線）のパラドクス』（講談社選書メチエ、平11）58頁。

(8) ここに挙げたうち特に神仙関係の事例や中国関係の事例については、注2拙稿参照。その他の個々の事例についても多くの諸論を参照したが、それらを一つ一つ列挙することはしない。

（本学教授）